

メキシコと建築

Mexico and Architecture

川上 聡

—— メキシコの建築家

メキシコで建築家といえば、フアン・オゴルマン (Juan O’Gorman)、フェリックス・キャンデラ (Felix Candela) もいるが、最初に頭に浮かぶのは、やはりルイス・バラガン (Luis Barragan) であろうか。

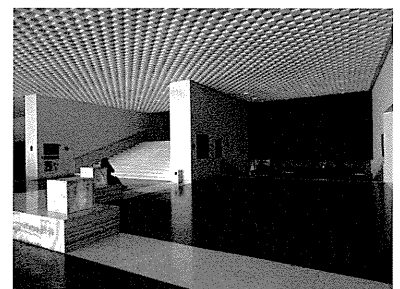
ルイス・バラガンは、1902年にグアダラハラ在地主階級の家生まれ、メキシコの伝統と文化が凝縮されたアシエンダの建築で少年時代を過ごした。1925年のヨーロッパ旅行で近代建築を目の当たりにしながら、スペイン、モロッコなどの地域色の濃い建築も訪れ、インターナショナリズムだけではなく地域主義的なものからも多大な影響を受けた。自邸、ヒラルディ邸、トラルパンの修道院など、メキシコの伝統的な煉瓦組積造、モルタル塗り仕上げを抽象化した単純な箱型の建築構成によって実現された、リズムカルなシーケンスと、自然光と色の壁や水面などの空間演出で、感情に訴える精神性の高い作品を残した。

—— リカルド・レゴレッタ

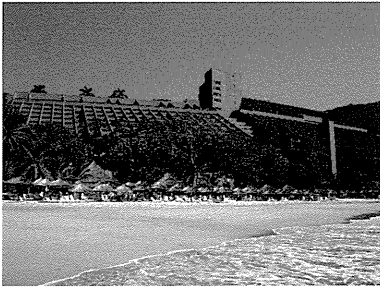
そんなバラガンと親しい交友関係にあった、リカルド・レゴレッタ (Ricardo Legorreta) は1931年生まれ。30年近い歳の差にもかかわらず、バラガンとレゴレッタは親友であり、その交友を通して互いに大きな刺激となった。

レゴレッタはメキシコ自治大学で建築を学び、メキシコモダニズムを代表する建築家ホセ・ビジャグラン (Jose Villagran) のもとで修業をし、その後独立、1968年のメキシコオリンピックに合わせて計画されたメキシコシティのカミノリアルホテルで、一躍脚光を浴びる。それまで構造や構成の表現を重視した作品を残していたが、ここではバラガンと同様に単純な煉瓦組積構造を採用している。都市型ホテルにもかかわらず、高層を避け、この構造で可能であった5層まで高さを制限し平面的なホテルを設計、東西のストリートのレベル差を生かして段差をつけながらエントランスやロビーを平面的に繋ぎ、シーケンスが豊かな空間体験を演出している。イサム・ノグチ、マティアス・ゲーリッツ (Mathias Goeritz)、ルフィーノ・タマヨ (Rufino Tamayo)、アルバース夫妻 (Anni & Josef Albers) などのアーティストや、ランス・ワイマン (Lance Wyman) といったグラフィックデザイナーと協働し、建築とアートの、そして建築とデザインのコラボレーションが実現されている。

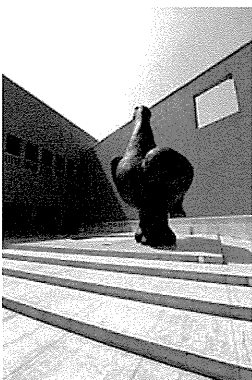
カミノリアルホテルと同様、レゴレッタの建築作品のほとんどが、煉瓦あるいはコンクリートブロックの組積構造に、アプラナードと呼ばれる職人の手作業 (マノデオブラ) のモルタル仕上げの上にペイントと、メキシコでは慣習的で単純な



カミノリアルホテル



ウェスティンプリサスホテル



モンテレイ現代美術館



テコラレスの家

方法で行われている。外部のボリュームの組み合わせでは、メキシコ各地にみられるテオティワカン、パレンケ、ウシュマルといったプレヒスピニックの土着的な遺跡建築や、あるいは内陸部の修道院、カリブ海の要塞、石造のアシエンダ建築などからインスピレーションを受け、メキシコの砂漠などの土、砂、石といった風景の色を用いているか、あるいはその土地の石を直接使用している。バラガンのように、与えられた敷地の四角の箱を機能の入ったルームで割っていくというよりは、機能の入ったボリュームを足していき、外部にも風景をつくっている。

構造や外部の構成は単純な方法で構築しているにもかかわらず、内部空間の方はダイナミックで、トップライトまで5層吹き抜け、100メートル超のロビーなど、普通の建物ではなかなか味わえないスケールを実現し、その中で水や色が光と共演する。壁や家具では色鮮やかな花や植物などの色が用いられ、アートや民芸品が溢れ、メキシコらしい彩り鮮やかな生き生きとした世界が体験できる。

レゴレッタの代表作には、カミノリアルホテルの他、ウェスティンプリサスホテル、モンテレイ現代美術館、パーシングスクエア、ラベリント博物館、住宅では、モンタルバン邸、コロラドの家、モンテタウロの自邸、テコラレスの家などがある。大規模な公共建築から小住宅まで含め、世界中で100を超える作品を残している。

—— メキシコシティ

今から遡ること12年前の2004年春、大学院を修了した私はリカルド・レゴレッタの事務所で勤務することになり、メキシコシティへ生活の場を移した。大学時代の恩師、高松伸先生のすすめもあり、レゴレッタの建築には自らの建築の作り方で共感するものがあつたので、迷うことなく決断した。自らメキシコに足を運んで事務所をノックしたのを覚えている。レゴレッタは、「君のような人材を待っていたよ」と快く迎えてくれた。

メキシコシティは標高2200メートルの高山であり、緯度が低い常夏のメキシコにもかかわらず比較的涼しい気候。雨季は夕方の決まった時間に強い雨が降るが、それ以外は年中を通して空には雲一つない快晴の日々が続き、濃い青空を背景にブーゲンビリアなどの色鮮やかな花が咲き乱れる。

メキシコというとまずは砂漠にサボテンを想像するが、メキシコシティは人口2000万人のアメリカ大陸を代表する大都会。混在するビルやアパートは遠くまでどこまでも同じ風景が続く。ラッシュアワーには大渋滞で車はクラクション以外の機能が停止する。メトロには、日本と同じように次から次へと人が駆け込むが、時間通りに来ない電車に入りきるわけもなく、まさにカオスである。

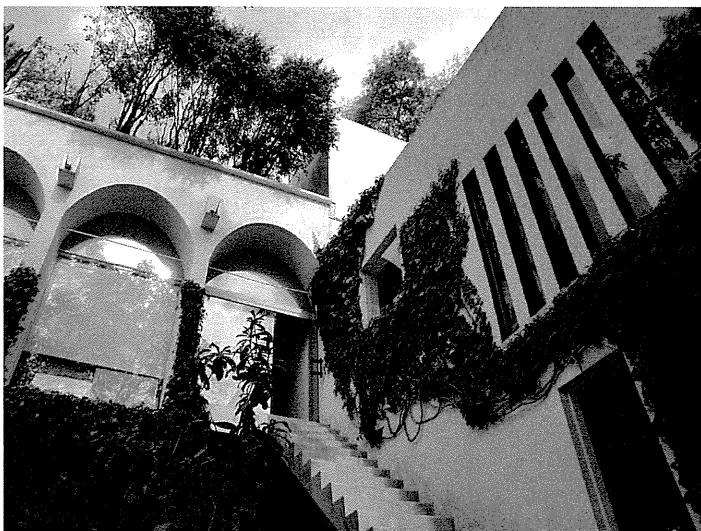
しかし、やはり大都市ならではの魅力がある。活気が溢れるにぎやかな街であり、タコス、ケサディージャを堪能する観光客も絶えない。週末となると若者はテキー

ラやメスカルを片手にフィエスタ探し、夜の街を徘徊する。メキシコという歴史、伝統、文化の深い、アイデンティティのある街へ世界中からあらゆる分野のアーティストが集まる。一度言葉を交わせれば皆アミーゴである。

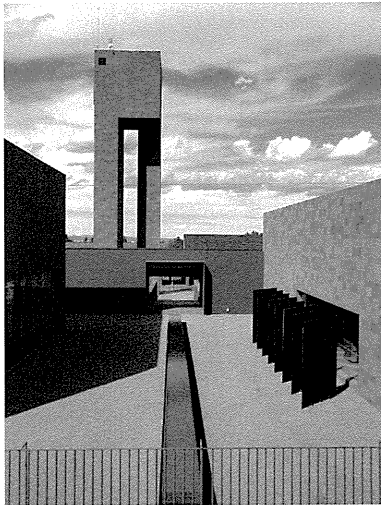
—— レゴレッタ事務所

レゴレッタ事務所は、リカルド・レゴレッタが同級生のパートナー二人と設立し、20年ほど前から息子のビクトール・レゴレッタ（Victor Legorreta）と二人で舵取りをしてきた。事務所はメキシコシティのローマスと呼ばれる高級住宅街に位置し、丘の上のエントランスから、階段で谷の方へ入り込んでいく。会議室やテラスからは谷への景色を一望することができる。中心には天井の高い段差上の贅沢な所員の作業スペースがあり、会議室の机は3m × 3mの無垢材を継ぎ合わせたもの、大きな図面を広げて作業を行う。

メキシコ国内のみならず、アメリカ大陸を筆頭に世界各地で作品があり、日本でも逗子に住宅作品がある。世界中にプロジェクトを抱えているという事実とは対照的に、ヨーロッパの有名事務所と比較すると国際色豊かとはいえず、外国人は平均1人か2人。その外国人もほとんどがスペイン語を母国語とし、事務所内で使用するの、スペイン語である。私が入所した当時は総勢30人程度だったが徐々に規模を大きくし、現在では所員は80名程度である。2015年には創立50



レゴレッタ事務所



ラビリント博物館



済州島ホテル兼週末住宅

周年を迎えた。

私は入所後、模型作成、PRで写真整理などの雑用をしながら、レゴレッタの過去の名作や進行中のプロジェクトに触れ、3ヶ月後、AutoCADで図面を引く日々が始まった。当初担当したプロジェクトにラビリント博物館がある。サンルイスポトシの砂漠の乾燥した地にメキシコシティのパパロテ博物館が企画した新しい博物館。ひたすら図面を引いてレゴレッタ建築のエッセンスを学んだ。その後、サポパンの分譲地開発計画、グアダハララの住宅、アカプルコの集合住宅、カタールの大学都市などの計画を担当。2008年からは韓国の済州島でのホテル兼週末集合住宅の計画を担当した。8万平米の大きなプロジェクトで、半年ほど韓国の現場に駐在し、現場管理も行った。

—— レゴレッタ高松宮殿下記念世界文化賞受賞、そして死去

リカルド・レゴレッタは国内の賞の他、1999年にUIAゴールドメダル、2000年にAIAゴールドメダルを受賞して、2011年には日本の高松宮殿下記念世界文化賞を小澤征爾やアニッシュ・カプーア（Anish Kapoor）など他分野の芸術家と同時に受賞した。

レゴレッタは2011年10月の高松殿下記念世界文化賞の授賞式後、京都を訪問中に体調を崩しそのまま入院、その後病院を転々としながらメキシコまで帰国するが、体調を悪化させ、2011年12月に死去。メキシコの建築界、芸術界では非常に悲しい出来事であった。すでにガンを告知されていたとはいえ、とても残念な別れだった。我々には建築に対する姿勢、情熱、厳しさを身をもって教えてくれたし、何より、これほど人間味のある建築家の元で仕事をすることができて、本当に光栄だったと思う。歳をまったく感じさせず、若い我々より元気で、エネルギーで、パワフルな存在だった。情に深く、皆から愛される存在で、友人も多かった。優しく寛容で、我々所員をどなりつけた後は、いつも笑顔であった。まるで子供と接するように。

レゴレッタの死去、大きなモチベーションを失い事務所退職も考えたが、一緒に仕事をしてきたリカルドの息子のビクトールや同僚のこと、また現在進行中のプロジェクトのことを考えて、レゴレッタ事務所では仕事を続けることとした。所員一同レゴレッタの事務所は健在であることを証明したかった。事務所が一番規模の大きなプロジェクトはキャンセルされたりもした。しかし、これまでも事務所を切り盛りしてきた、息子のビクトールは今まで通り淡々とプロジェクトをこなした。責任感の強い優秀な彼はひるむことなく、父の遺志を継ぎ、レゴレッタ事務所の活動を維持することに成功した。

—— BBVA リチャード・ロジャース事務所との協働

そんな中の進行中のプロジェクトの一つに、リチャード・ロジャース (Richard Rogers) 事務所と協働作品で、メキシコシティに位置する BBVA バンコメール銀行のメキシコ本社ビルがあった。リカルドとリチャードは Ricardo と Richard で言語は違うが同じ名前である。昔から親しい交流があった。

レゴレッタで常に壁構造で煉瓦やブロックを積んできた我々にとっては新しい挑戦だった。ロジャース事務所の数人のアーキテクトがメキシコに駐在し協働作業を行い、デザインを繰り返した。

レゴレッタとロジャースといった、全く異なる建築のアプローチをする建築家が協働するのは不可能にも思えたが、結果として、ロジャース事務所の構造や設備といったコンストラクションのシステムを重視した構成の中で、それに加えて、レゴレッタの現象や体験に対するエモーショナルな空間の表現の両方が実現された。構造部材も鉄骨のような線材だけではなく、マッシブなコンクリートボリュームもあったりと、二人の共演が感じられる。二人とも色を使う建築家だが、レゴレッタの好む紫色がアルミのファサードで採用されている。メキシコのハカラランダの色である。

—— マウリシオ・ロチャ

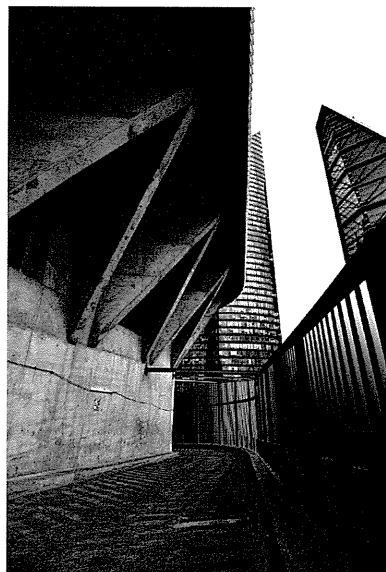
2014年、同時期に進行していたケタロの集合住宅プロジェクトを一段落させ、メキシコの太平洋岸に位置するプエルト・バジャルタ南部の無人の半島タマリンドにフォーシーズンズホテルを設計することになる。レゴレッタとメキシコの若手建築家を代表するマウリシオ・ロチャ (Mauricio Rocha) との協働プロジェクト。メキシコは現在、建築界が盛んで活発であり、アルベルト・カラチ (Alberto Kalach)、ハビエル・サンチェス (Javier Sanchez)、タティアナ・ビルバオ (Tatiana Bilbao) など若くて優秀な建築家が多く存在するが、マウリシオ・ロチャはその中でもひととき目立った存在である。

マウリシオ・ロチャは1950年生まれ。建築を構成するにあたり、単純なメソッドではなく、その地域で使える素材や、メキシコの職人の技を生かし、メキシコだからこそできることを検討して構造システムを構築し、素材や職人の技をインテリアの仕上げではなく、構造のシステムの中で考えることをしている数少ない建築家である。代表作には土壁で作ったオアハカの造形美術学校がある。

このホテルはそんな彼との協働で、最低でも週一度は一日中デザインミーティングをこなす濃密なスケジュールでデザインを進行させた。レゴレッタもロチャ

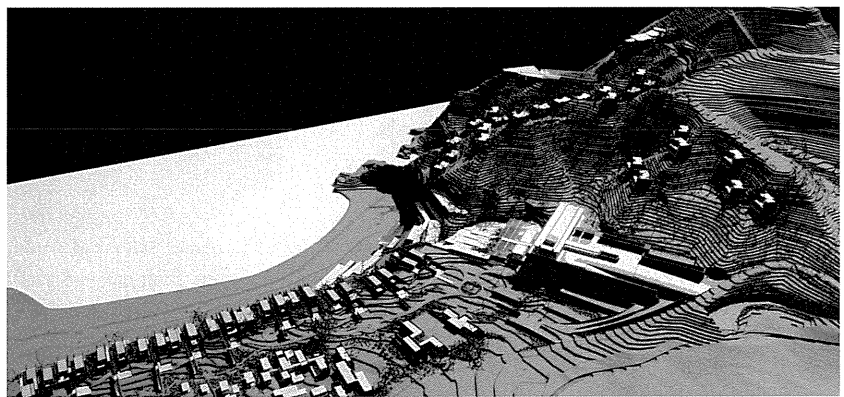


BBVA BANCOMER 本社ビル外観



BBVA BANCOMER 本社ビル オーディトリウム

もメキシコを愛する建築家であり、地域性を重要視するという点では話が進みやすかったが、レゴレッタが機能とボリュームで全体の形態をスタディ、決定しようとするのに対し、ロチャは面や線といった建築のエレメントで、構造のコンセプトからデザインに入るといった違いもあり、デザイン決定のプロセスは2倍以上の時間と労力をとられることになった。それでも互いの建築を理解し、互いの手法をより高い次元へと昇華することに成功したのではないだろうか。数千枚に上るスケッチにおよぶスタディの結果、レゴレッタの自然の中に溶け込む遺跡のような粗いマッシブなボリュームが、ロチャの緻密な構造システムによって構築され、内部ではダイナミックなスケール感の空間が実現されている。



フォーシーズンズリゾート タマリンド

—— 事務所退職、京都

2016年春、日本で自らの設計活動を行う決意をし、レゴレッタ事務所を退職した。ビクトール、また事務所の同僚たちは、私の旅立ちを惜しんでくれたが、同時に多くの励ましと応援とともに送り出してくれた。

退職後3カ月たった今、京都でこのエッセイを書いている。マヌエル・ポンセ(Manuel Ponce)のスケルツィーノ・メヒカーノを聴きながら、メキシコでの仕事と生活を振り返りつつ。12年間スペイン語で仕事をしてきて、今そのことについて日本語で書いているのが不自然でならない。乾燥した常夏のメキシコで、積層、石で建築を考えてきた私が、これから四季のある日本で、軸組み、木を中心にした建築とともに何ができるのか、明快さ、明るさを美学とするメキシコから、陰影を好み、わびさびの精神をもつ日本に移り、何を表現をすることができるのか、自分でもまったく予想ができないが、それでも今後、何かしらの形で、メキシコで学んだ建築のエッセンスを実現できればと思う。